

アメリカ学会会報

— The American Studies Newsletter —

No.208

April 2022

民主主義の危機と信用

大塚 寿郎

「民主主義の危機」という言葉をよく耳にするが、盗まれた大統領選、Q アノンの陰謀、SNS による世論操作とフェイクニュースの拡散、感情に流されるポピュリズムとその批判、連邦議会議事堂の襲撃など、最近アメリカで取り沙汰される事柄を見ると、民主主義という制度を支える他人への信頼の揺らぎ、つまり「信用の危機」とも言えそうだ。

授業で建国期のアメリカ小説を読んでいるが、今のアメリカを彷彿とさせ面白い。多くの小説が時の政治論争を反映しており、独立革命後の共和国建設の過程で、他人を信頼できるかどうかが大問題だったことがよく分かる。これは揺籃期の民主主義への信頼と関わっている。

小説の会話（書簡体小説では手紙の交換）で登場人物たちが口にする理想の政治理論の端々に他人への不信が表れる。作品は信用ならない人物のオンパレードだ。例えば Charles Brockden Brown の *Wieland* (1798)。腹話術を使う謎の人物カーウィンに翻弄される若き登場人物たちは、誰の言うことが真実なのか分からず互いに不信感を抱くようになる。謎の死を遂げる彼らの父親はあやしい狂信的宗教の創始者。結局、作品冒頭で描かれる理想郷は不信によって崩壊する。この姉妹作となる小説では当時陰謀論の中心だった秘密結社イルミナティとカーウィンの関係が暗示される。

「誘惑小説」と言われるジャンルも流行った。Hannah Webster Foster の *The Coquette* (1797)。女性を誑かすジゴロに騙され死んでしまうコケティッシュな女性のお話だ。面白いのは、“coquette” はもともとジェンダーによらない話上手を指す言葉だったということだ。信用できないのは口説き上手のジゴロか、淑女の規範に収まらず、相手をその気にさせ翻弄するコケットか。新聞記事になった出来事に基づいたこの作品は、メディアが事実を歪めてしまうことへの批判としても読める。同じ事件を扱った William Hill Brown の *The Power of Sympathy* (1789) では、女性黒人奴隷の窮状に共感する登場人物がセンチメンタルだと批判される。理性ではなく感情に支配される人間は誘惑に弱く信用ならん、とい

うわけだ。一方で、他人の感情を理解できない人間は信頼できないという声も聞こえる。

信用できない人間の集団が下す政治判断は信用できるのか。自分たちの権利を代表させるのに信頼できる人間はいるのか。共有されている情報に信憑性はあるのか。民主主義という、信頼を必要とする新しい政治をどう扱っていいのか迷う人々の姿が浮かび上がる。

民主主義が機能するには、制度と他者への信頼からなる「社会関係資本 (Social Capital)」が不可欠であるとしたのは、*Bowling Alone* (2000) の著者 Robert Putnam だが、家族、教会、ボランティア・アソシエーションのような他人への信頼を生み出すコミュニティの衰退に警鐘を鳴らした。2021 年のギャラップの世論調査では、アメリカ国民の 55% が自国民の判断力を信用できると答えているが、1974 年の調査開始以来最低だという。2019 年のピュー・リサーチセンターの世論調査では、社会的に不利な立場にある層や若者が他人への信用度の低いグループに分類されている。やはり民主主義は危機を迎えているのか。

翻ってみれば、伝統的な政治体制や教会制度への不信から始まり、利害の衝突を前提とする近代の民主主義は、最初から不信を織り込み済みの制度ではないか。信頼と不信のバランスをどうとるかが民主主義の要である。諦めやシニシズムではない、健全な不信は民主主義社会に必要な不可欠なものである。先に触れたピュー・リサーチセンターの調査では、大半のアメリカ国民が他者への信頼の回復は可能であると信じているという。一見矛盾と見えるが、民主主義のレジリエンスを期待させる。

むしろ、不信感を持たないこと、不信を口にできなくなることが民主主義の危機だろう。不信を巡る自由なダイアログが交わされることが近代に登場してきた小説というデモクラティックなジャンルの特徴なのだが、日本の学生たちにも健全な不信の必要を教える機会なのかもしれない。

(上智大学)

2022 年 アメリカ学会 第 56 回年次大会 プログラム

1. 開催日 2022 年 6 月 4 日（土）・6 月 5 日（日）

※ 今大会は中央大学の後援を得て開催されます。

※ 今大会は対面で行う予定ですが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大状況によっては、オンラインに切り替えることもございます。

2. 会場 中央大学多摩キャンパス 3 号館・FOREST GATEWAY（F 号館）

大会企画委員長 麻生享志 asoes アットマーク waseda.jp

会場責任者 一政（野村）史織 shio.11d アットマーク g.chuo-u.ac.jp

小田悠生 yuki_oda アットマーク tamacc.chuo-u.ac.jp

3. プログラム（報告要旨は別に「報告要旨集」に掲載されます。時間は全て日本標準時です）

* タイトルの日英別は、発言言語によるものです。

* 今大会は対面開催の場合でも、分科会はオンラインで開催されます。各分科会の開催時間等は別にお知らせいたします。

第 1 日 2022 年 6 月 4 日（土）

午前の部

自由論題報告 10:00～11:30

【Session A アメリカの政治と冷戦 American Politics and the Cold War】 3 号館 3351

司 会：岡山裕（慶應義塾大学）

討論者：岡山裕，平田雅己（名古屋市立大学）

報告者：

李雨桐（神戸大学・院）

「アメリカ政治における多州連合訴訟の政治的役割の拡大」

阿部碧（一橋大学・院）

「燃えるわたしの痛み，それは誰の痛みなのか？——冷戦構造下における焼身行為の感情史的読み解きの一考察」

【Session B アメリカの文化 American Culture】 3 号館 3352

司 会：石原剛（東京大学）

討論者：齊藤弘平（青山学院大学）

報告者：

黒沢真里子（専修大学）

「計量テキスト分析を用いた葬儀雑誌 *The Casket* の研究——1870 年代から 90 年代の掲載広告を中心に」

入江哲朗（日本学術振興会特別研究員 PD）

「世紀転換期アメリカ思想史における蛸の形象——フランク・ノリスとウィリアム・ジェイムズの共通項を探る」

休憩 11:30～12:30

理事・評議員会 11:35～12:30 3 号館 3455

午後の部

清水博賞・斎藤真賞・中原伸之賞授賞式 12:35～12:55 3 号館 3115

第一部 Keynote Speeches 13:00～13:50 3 号館 3115

Chair: Takuya SASAKI 佐々木卓也（Vice-President, JAAS/Rikkyo University 立教大学）

Keynote Speakers:

Yoshiko UZAWA 宇沢美子（President, JAAS/Keio University 慶應義塾大学）

“Asian Theater as Techne: *The Yellow Jacket* (1912) and Its Mixed Legacy of ‘Chinese’ Stagecraft in America”

Seong-Ho LIM（President, ASAK/Kyung Hee University 慶熙大学）

“What Kind of ‘America’ Mattered in the State-Building of South Korea? The ‘Tudor’ Polity vs. the ‘Progressive’ State”

第二部 シンポジウム「コロナパンデミックと人種」 14:00～17:45 3号館 3115

司会・討論者：佐藤千登勢（筑波大学）

報告：

南川文里（同志社大学）

「新型コロナウイルスにおける多文化主義——1990年代「文化戦争」から考える」

今野裕子（亜細亜大学）

「20世紀転換期のアメリカ公衆衛生と日本人移民」

野口久美子（明治学院大学）

「コロナ禍の先住民コミュニティ——「不可視化」の暴力といかに戦うか」

森山貴仁（南山大学）

「黒いトランピスト——マイノリティ保守と多人種化する白人性」



第2日 2022年6月5日（日）

午前の部

部会・ワークショップ 9:00～11:45

【ワークショップ A Queer Futurities: Utopias, Dystopias and Disruptive Transnationalism: Gender, Environment and Religion I】 F号館ホール

Chair: Kazuto OSHIO 小塩和人（Sophia University 上智大学）

Commentator: Masami YUKI 結城正美（Aoyama Gakuin University 青山学院大学）

Speakers:

Jason RUIZ (ASA/University of Notre Dame)

“Say Goodnight to the Bad Guy: *Scarface*, *Miami Vice*, and South Florida in War-on-Drugs Popular Culture”

Erik LOOMIS (OAH/University of Rhode Island)

“Oregonians and Indian Gurus: The Controversy over Rajneeshpuram within the Context of the Pacific Northwest’s Political and Economic Transformation in the 1980s”

Koji ITO 伊藤孝治（Osaka University 大阪大学）

“The Making of a Sockeye Salmon-Centered Ecosystem in Alaska’s Bristol Bay and the Birth of an American Ichthyological Empire during the Interwar Period”

【部会 A 「帝国としてのアメリカ」再編と移民／難民】 F号館 F602

司会：大津留（北川）千恵子（関西大学）

討論者：貴堂嘉之（一橋大学）

報告者：

佐原彩子（共立女子大学）

「難民収容レジームの起源」

上英明（東京大学）

「移民危機はなぜ起きるのか？——冷戦後の米・キューバ移民交渉と「予告された危機」」

錦田愛子（慶應義塾大学）

「アメリカの中東系移民／難民の受け入れと「対テロ」戦争」

【部会 B アメリカ宗教と対立・融和・変革】 3号館 3114

司会：山本貴裕（広島経済大学）

討論者：増井志津代（上智大学）

報告者：

佐藤清子（東京大学）

「アメリカの無宗教を考える——新たな最大少数派（非）宗教集団」

石黒安里（同志社大学）

「アメリカ・ユダヤ人の信仰と政治的分極化——近年の動向を中心に」

藤本龍児（帝京大学）

「現代アメリカ政治と宗教——「ポスト世俗化」社会」

休憩 11:45～12:50

新理事会 12:10～12:40 3号館 3115

総会 12:50～13:20 3号館 3115

午後の部

部会・ワークショップ 13:30~16:15

【ワークショップ B Queer Futurities: Utopias, Dystopias and Disruptive Transnationalism: Gender, Environment and Religion II】 F 号館 ホール

Chair: Myles CHILTON (Nihon University 日本大学)

Commentator: Nathaniel PRESTON (Ritsumeikan University 立命館大学)

Speakers :

Martin F. MANALANSAN IV (ASA/University of Minnesota, Twin Cities)

“Atopias: Queering Mess, Mesh and Migrancy”

Farina Noelani KING (OAH/Northeastern State University)

“‘Art Pulled Me Out’: Diné Expressions of Hózhǒ at Intermountain Boarding School, 1950-1984”

Hiromi OCHI 越智博美 (Senshu University 専修大学)

“Resisting Normative Gender and Normative Aging: Rethinking Temporality in Michael Cunningham’s *The Hours*”

【部会 C 文学と歴史が交わる場所——学際性をめぐる対話】 F 号館 F602

司 会：佐久間みかよ (学習院女子大学)

報告者：

白川恵子 (同志社大学)

「ナット・ターナーの場合——歴史記述と文学表象との「厄介な」不／可分性」

竹谷悦子 (筑波大学)

「『日本を閉ざす鉄のカーテン』——航空アーカイヴとアメリカ文学史の交錯」

討論者

久野愛 (東京大学)

丸山雄生 (東海大学)

【部会 D 差異とイメージ——マイノリティ表象の現在】 3 号館 3114

司 会：生井英考 (立教大学)

討論者：江崎聡子 (聖学院大学)

報告者：

竹沢泰子 (京都大学)

「アメリカ合衆国における人種のステレオタイプの過去と現在」

鎌田遵 (亜細亜大学)

「北米先住民の表象——イメージと現実のはざまで」

中村理香 (成城大学)

「『凌辱された身体』と人種・ジェンダー・表象のポリティクス——アジア系アメリカ／ディアスポラと在米「慰安婦」碑」

杉山直子 (日本女子大学)

「『合衆国初の黒人大統領』のもたらしたもの——「黒人」表象の意味とその変遷」

4. 注意事項

- 1) 今大会は対面で開催いたしますが、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の状況に関する主催校の方針によっては、オンライン開催に切り替える可能性もございます。その際は、学会公式ウェブサイトおよび学会員メーリングリストにて、詳細をお知らせいたします。
- 2) 大会参加登録は、ウェブサイトの大会参加登録ページ上で、必ず 2022 年 5 月 22 日 (日) までをお願いいたします。参加登録ページの URL は、アメリカ学会会員用メーリングリストで配信いたします。会員の方でメールが届かなかった方は、「迷惑メール (junk mail)」フォルダもご確認ください。見つからなかった場合は、お手数をおかけして大変申し訳ございませんが、大会企画委員会 (program アットマーク jaas.gr.jp) までご連絡ください。
- 3) 大会期間中、キャンパス内の食堂は使用できません。飲食店はキャンパスから離れているので、昼食を各自ご持参ください。なお、最寄りのモノレール「中央大学・明星大学」駅にはコンビニエンスストアがございます。
- 4) 今大会は懇親会を開催いたしませんので、ご了承ください。

第 56 回年次大会分科会のご案内

* スケジュール等詳細は後日通知いたします

1. 「アメリカ政治」

責任者：宮田智之（帝京大学）tomoyukimiyata アットマーク main.teikyo-u.ac.jp

報告 1：相川裕亮（広島大学）「福音派はアメリカの政治制度をどのように理解しているか」

報告 2：杉野綾子（武蔵野大学）「金融規制を通じた気候変動対策——規則制定に対する大統領の関与の観点から」

報告 3：舟津奈緒子（日本国際問題研究所）「バイデン外交の特徴と課題」

本年度のアメリカ政治分科会は、3名の会員より、アメリカ政治の各分野における最新の研究成果を報告いただく。相川会員は、保守的なキリスト教徒の党派政治への関わりを、1970年代に福音派の政治動員を試みたフランシス・シェーファーの建国の父祖理解に注目しつつ分析する。杉野会員は、オバマ、バイデン両政権が金融機関への監督を通じて化石燃料産業への資金流入制限を図る中、いわゆる化石燃料投資撤退（ダイベストメント）の政策方針がどのように受容され、どのような政治論争を引き起こしているのか、特に大統領権限に注目して明らかにする。舟津会員は、過去のアメリカ外交との比較やアメリカ外交の潮流との関係を通じて、バイデン外交の特徴を浮き彫りにするとともに、国内の党派対立や党内対立に象徴されるバイデン外交を推進する上での課題について考察する。

2. 「アメリカ国際関係史」

責任者：島村直幸（杏林大学）naoyuki_shimamura アットマーク hotmail.com

報告：吉留公太（神奈川大学）

批評：佐々木卓也（立教大学）

合評会：吉留公太『ドイツ統一とアメリカ外交』（晃洋書房、2021年）

吉留公太『ドイツ統一とアメリカ外交』（晃洋書房、2021年）の合評会を行う。同書は、近年公開されたアメリカや各国の一次資料と国際的な研究動向を踏まえて、ジョージ・H・W・ブッシュ政権の対ソ・対ヨーロッパ政策を解明し、東西ドイツ、アメリカ、ソ連、イギリス、フランスが行ったドイツ統一交渉の経緯を詳細に分析することによって、ヨーロッパ地域における冷戦の終結過程の全体像に迫っている。冷戦の開始とアメリカ外交の研究で知られる、アメリカ外交史研究の第一人者の佐々木卓也会員に批評を行っていただく。

3. 「日米関係」

責任者：末次俊之（専修大学）suetoshi007 アットマーク gmail.com

報告 1：村岡敬明（明治大学）「西銘県政における沖縄の公共政策——西銘知事の米軍基地問題への対応を中心として」

報告 2：東江日出郎（東北公益文科大学）「米中冷戦とドゥテルテのフィリピン外交」

今回の分科会では、まず、沖縄米軍基地に関連して、西銘順治沖縄県知事（1978年12月10日～1990年12月9日）が打ち出した公共政策の中から、西銘知事が2度にわたる訪米で米国政府高官に直接要請した水質汚染につながる福地ダムでの演習の廃止、海兵隊の演習場内での実弾射撃の廃止、および普天間飛行場の返還などの政策の分析を報告する。また、返還された2か所の基地跡地（ハンビー飛行場跡地、牧港補給基地の住宅跡地）の有効利用についても検討する。

次に、多数の米軍基地が存在するフィリピンについて、本報告では、ドゥテルテ政権の時期に展開されたフィリピン外交を、オバマ、トランプ、バイデンという3人の米国大統領の交代の時期に合わせて区分し、それぞれの時期の特徴を捉え、最後にドゥテルテ政権の外交を総括する。さらに一般に「自立外交」と言われることの多いドゥテルテのフィリピン外交は、本当に自立的なのか、ということも考察する。

4. 「経済・経済史」

責任者：名和洋人（名城大学）nawa アットマーク meijo-u.ac.jp

報告：手塚沙織（南山大学）「移民政策における新興勢力としての米IT産業」

GAFAと称される米巨大IT企業の4社、グーグル、アップル、フェイスブック、アマゾンの市場支配力が、個人データの利用から格差拡大まで、社会のあらゆる側面で問題視されている。こういった米巨大IT企業の影響力は経済から政治にまで幅広いが、その中でも移民政策をめぐる政治における影響力には、比較的関心が集まってこなかった。だが、GAFAを含めた米IT企業の多くが、海外出身のエンジニアといった高度外国人材を多数雇用しており、外国人労働者に対する受入政策である移民政策は、米IT企業の人材戦略に影響するため、米IT企業がその政治的活動を活発化させるのは当然と言えよう。しかし、米IT企業はいつから、そしてどのように移民政策をめぐる政治に本格的に関わり始めたのだろうか。また、それは既存のアクターとはどういった類似点や相違点があるのだろうか。本報告では、移民政策をめぐる政治における新興勢力としての米IT産業の影響力を考察する。

5. 「アジア系アメリカ研究」

責任者：野崎京子（京都産業大学）kyoko.nozaki.103039 アットマーク gmail.com

報告：山中美潮（上智大学）「20世紀初頭のアメリカ南部・メキシコ湾岸地方と日本人移住——稲作と人種関係」

本報告では、20世紀転換期にアメリカ南部・メキシコ湾岸地方に移住した日本人稲作従事者の姿を通じて、アメリカ・日本の帝国拡大と日本人の人種観を考察する。20世紀初頭、アメリカ南部は稲作を媒介として、アメリカと

日本の帝國的野心を結びつけた接合点の一つであった。南北戦争以降メキシコ湾岸部では北部・中西部資本の影響で稲作の近代化が進められたが、同時に世紀転換期には稲田開発のため日本人移住を一時的に奨励していた。本報告は、こうしたアメリカ側の動きに対し、日本人移民が当該地方を稲作処女地と見なし土地所有者として移住したこと、そして日本から持ち込まれた種籾栽培の成功とジム・クロウ社会の人種規範が、日本人の植民としての帝国観と人種観の形成に影響を及ぼしたことを解明したい。具体的にはテキサス州ウェブスターに移住し現地日本人の精神的支柱であった西原清東の例を中心に報告を行う。

6. 「アメリカ女性史・ジェンダー研究」

責任者：鈴木周太郎（鶴見大学）shutarosuzuki アットマーク me.com

報告：弓削尚子（早稲田大学） 兼子歩（明治大学） 小檜山ルイ（東京女子大学）

合評会：弓削尚子著『はじめての西洋ジェンダー史——家族史からグローバル・ヒストリーまで』（山川出版社、2021年）

弓削尚子氏の著書『はじめての西洋ジェンダー史——家族史からグローバル・ヒストリーまで』についての合評会をおこなう。家族史、女性史、ジェンダー史、身体史、男性史、軍隊の歴史、グローバル・ヒストリーといったこれまでの歴史学のアプローチの変化についてとりながら、西洋の歴史をジェンダーの視点から考察したこの本について、まずは弓削氏より紹介していただく。その後、兼子歩氏と小檜山ルイ氏より書評コメントを発表し、弓削氏による応答後、フロアと質疑応答およびディスカッションをおこなう。アメリカ学会の年次大会においてこの本の合評会をおこなうことは大変意義のあることと考えるので、広範な関心を持つ会員による活発な議論を期待したい。

7. 「アメリカ先住民研究」

責任者：佐藤円（大妻女子大学）mdsato アットマーク otsuma.ac.jp

報告：フェリーナ・ネオラニ・キング（ノースイースタン州立大学）「世代を超えたディネ女性の施療と COVID-19」

While media, stories, and cries of my people and community show the rampage of Dikos Nstaaígíí-19, the coronavirus monster, many have asked why the virus is prevalent in the Navajo Nation. This presentation will address that question by examining the intertwined histories of colonialism and disease that have plagued Navajos. In recent years, three particular diseases of diabetes, cancer, and COVID-19 have threatened and claimed many Diné lives, which this talk will contextualize and assess. Most importantly, the presenter, Dr. Farina King (who is a descendant of Diné healers), will acknowledge Diné women healers and warriors of different generations. According to Diné ancestral teachings, warriors are the ones who care for the sick, feed the hungry, bring wood for the fires, and unite the people. Diné have passed on teachings of Sí'ah Naaghái Bik'eh Hózhó, simply translated as "Walk in Beauty" or "live to old age in beauty." Healing is an essential part of this never-ending journey and cycle through generations and time, as Diné constantly seek to restore balance and harmony—hózhó—in all things within and around them.

※注意事項：報告者の来日が新型コロナウイルス感染症等の影響により見送りになる場合には、本分科会は中止となります。

8. 「初期アメリカ」

責任者：笠井俊和（群馬県立女子大学）toshi_ks アットマーク mail.gpwu.ac.jp

報告：遠藤寛文（防衛大学校）「欧州帝国間抗争の境界域としての北米辺境——1812年戦争期の西フロリダ併合政策（1810-1813年）を中心に」

コメンテーター：森丈夫（福岡大学）

世界史の教科書において、ルイジアナ購入（1803年）はアメリカが幸運にも広大な土地を格安で入手し、19世紀西漸運動の礎を築いた契機と説明される。しかし、はたして同時代人はこのような楽観的な世界観を共有していたのだろうか。広大な領土が簡単に譲渡されてしまう不運な事態はアメリカに対しても起こりえたのではないか。本報告では、合衆国初期の辺境に欧州帝国間抗争の境界域としての歴史を読み込む近年の研究視角を参照しつつ、1812年戦争期における西フロリダ併合政策（1810-1813年）の背景と実情を考察する。当時のアメリカ社会では連邦分割計画への恐怖や辺境住民に対する不信感が高まっていたが、現地では主流社会とは異なる境界域特有の慣習や帰属意識が共有されていた。本報告では、米西現地官吏の交渉過程に着目し、西フロリダ問題をアメリカ膨張主義の起源としてではなく、北米秩序の再編過程の表れとして捉え直すことを試みる。

9. 「文化・芸術史」

責任者：小林剛（関西大学）go アットマーク kansai-u.ac.jp

報告：山田優理（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）「『虚ろなアメリカの魂』——1950年代シカゴの記録としての映画『クライ・オブ・ジャズ』（1959）」

作曲家エド・ブランドを中心とした独立系映画製作会社が手掛けた短編映画『クライ・オブ・ジャズ』は、政治的な内容や拙い演技の所為もあり、1959年公開当時の商業的成功は限られたものであった。ジャズの音楽的構造と米国における黒人の社会的地位の間に共通項を見出そうとする本作品は、近年になって再評価が進み、2010年にはその

文化的・歴史的・芸術的価値が認められ、国立映画登録簿（National Film Registry）への追加が決定された。本発表では、作品中に描かれる人種やジェンダーを軸とした人間関係に着目し、1950年代のシカゴの社会状況に鑑みること、『クライ・オブ・ジャズ』の歴史的記録としての価値を模索する。とりわけ、人種統合が進まないハイド・パーク地区に黒人として暮らしたブランド自身の経験を強調することで、公民権運動の主流言説とは異なるリベラル批判としての本作品の可能性を論じる。

10. 「アメリカ社会と人種」

責任者：戸田山祐（大妻女子大学）todayama アットマーク otsuma.ac.jp

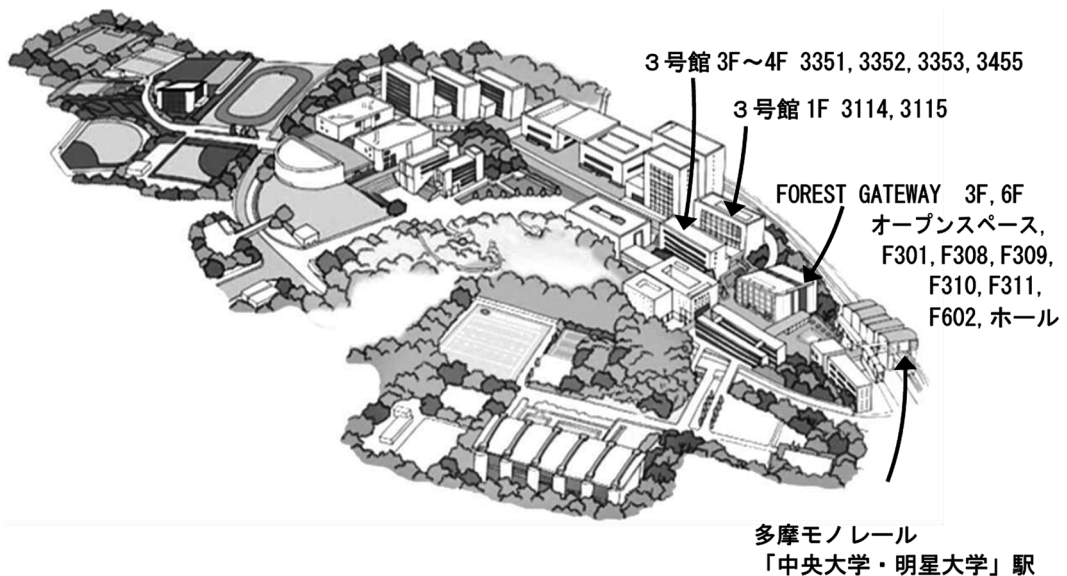
報告：山本航平（同志社大学）「連帯と交渉——20世紀前半キューバ・アメリカ合衆国間におけるアフリカ系の人的ネットワーク」

周知のとおり、キューバ第二次独立戦争（1895-98年）に端を発する「米西戦争」の結果として、キューバは1902年までアメリカ合衆国（以下、米国）の軍政下に置かれた。キューバ人を有色人種とみなす米国軍政府にとって、キューバ統治とは「劣った人種」をいかにあつかうかという問題と不可分であり、米国が持ち込んだ「科学的」な人種理論は軍政終了後もキューバで残存することとなった。かかる帝国主義的な構造下において、アフリカにルーツを持つキューバ人と米国人は、メキシコ湾を挟んだトランスナショナルな人種間連帯を模索した。本報告では、キューバにおける黒人奴隷制や人種分離・差別の様相を確認したのち、20世紀初頭のアフロキューバ人（アフリカ系キューバ人）がアラバマ州のタスキーギ師範・産業学院にいかなるまなざしを向け、どのように関わったのかを検討する。その後のガーヴェイズムの進展やハーレム・ルネサンスの高揚へのアフロキューバ人の貢献も射程におさめて議論を進めることで、キューバと米国のアフリカ系の人びとが構築した汎アメリカ的な社会的結合関係、あるいは人的ネットワークの一側面を提示したい。

5. 会場案内（F号館はFOREST GATEWAYビルを意味します）

受付	F号館3階	オープンスペース
大会本部・役員控室	F号館3階	F308, F309
会員控室・外国ゲスト控室	F号館3階	F310, F311
維持会員（書店）ブース	F号館3階	F301

中央大学多摩キャンパスマップ（<https://www.chuo-u.ac.jp/campusmap/tama/>）



2022 年プロセミナー開催のご案内

今年のプロセミナーはアメリカ学会年次大会第一日目の午前に、ASA および OAH から派遣される講師をコメンテーターとしてお迎えし、開催いたします。開催方式は対面とオンラインの組み合わせ（ハイブリッド）で行う予定です。

日時：6 月 4 日（土）9:00～11:30

会場：中央大学多摩キャンパス 3 号館 3 階 3354

開催形式：対面およびオンライン（ハイブリッド）

報告者：

ノミンエルデネ・エンヒバイヤル（筑波大学・院）：*The Mikado in Occupied Japan: Navy Wife, “Three Little Maids,” and Scriptive Things*

大賀瑛里子（ハワイ大学マノア校・院）：*Japanese Tourist Discourses of “Power Spot” on Kūkaniloko, Hawai‘i*

高橋茜（東京大学・院）：*“We All Lead It”: Multiethnic Unionism in the 20th Century American Southwest*

星野大輔（慶應義塾大学・院）：*Minority Inclusion in American Society and Military: How West Point Integrates Diversity*

山崎香織（東京大学・院）：*Rethinking “Human Rights Diplomacy”: U.S.–South Korea Relations under the Carter Administration*（以上 5 名。敬称略、順不同。）

コメンテーター：

Jason Ruiz（ASA/University of Notre Dame）

Martin F. Manalansan IV（ASA/University of Minnesota, Twin Cities）

Erik Loomis（OAH/University of Rhode Island）

Farina Noelani King（OAH/Northeastern State University）（以上 4 名。）

プログラム詳細と参加登録方法については、5 月中旬に学会 ML でご案内いたします。

国際委員会（international@jaas.gr.jp）

アメリカ学会海外渡航奨励金

— 国外の学会やシンポジウムで発表する方を対象とする助成制度のご案内 —

このたびアメリカ学会では、国外での学会やシンポジウムにて発表する方を対象に、以下の要領で渡航奨励金を支給することになりました。本制度による給付を希望する方は積極的にご応募ください。なお、今回（前期）の応募対象は、2022 年 8 月～2023 年 2 月に開催される学会です。2023 年 3 月～7 月開催の学会については、後期（12 月募集）の対象となります。

1. 応募資格：

- ① アメリカ学会の会員であること。年会費の滞納がないこと。
* 応募時にアメリカ学会への入会手続中である場合はその旨明示すること。
- ② 国際学会やシンポジウムでの発表時に、日本に在住し、日本からの旅費を要すること。
- ③ 発表内容がアメリカ研究に関するものであること。
- ④ 大学院生等の若手研究者を優先的に検討し、そのほか、助成の必要性、発表の内容を総合的に判断する。

2. 審査基準：

- ① 大学院生等の若手研究者を優先する。大学院生については発表をしない場合も応募可能。
- ② American Studies Association, American Studies Association of Korea, Organization of American Historians のいずれかの年次大会で発表する方を優先するが（ただし、OAH と隔年開催で 2022 年度の開催がない ASAK は、今回は対象外）、これら以外の国際学会やシンポジウムで発表する場合も応募できる。
- ③ 他組織からの援助のないものを原則として優先する。
- ④ そのほか、助成の必要性、発表の内容を総合的に判断する。

3. 応募方法、結果発表、発表後の提出書類

- ① 次の書類を 6 月 16 日から 30 日までの期間に、国際委員会（international@jaas.gr.jp）宛に送ること。応募メールの件名を「JAAS 海外渡航奨励金応募」と明記すること。
 - (1) 履歴書
 - (2) 業績書
 - (3) 発表が受け入れられたことを証明する文書（電子メール可）
 - (4) 発表のタイトルと要旨（英語で 250–300 語程度とする）

- (5) (ASA, ASAK, OAH 以外での発表の場合のみ) 当該国際学会やシンポジウムに関する情報(目的, 歴史, 規模等, 字数は指定しないが, 簡潔で正確であること) および開催期間
- (6) 理由書(奨励金を必要とする理由。字数は指定しないが, 簡潔であること。他組織からの援助のないものを原則として優先するので, 申請時にほかの組織による援助を申請中か, あるいは援助を受けることが決定した者は, その旨明記すること。ほかの組織による援助のなかには, 所属機関の研究費を充当する予定も含む。なお, 旅費・宿泊費(実費)の不足部分に限り, 他の補助金との併用が認められる。)
- ② 審査結果は, 7 月中に応募者に通知し, 学会 HP で公表する。
- ③ 発表終了後, 2 週間以内に報告書(邦語 1200 字程度あるいは英語 500 語程度とする)および領収書の原本(旅費・宿泊費)を提出すること。

4. 支給額

アジア圏の場合は一人 5 万円, アジア圏外の場合は一人 15 万円を原則とする。

国際委員会 (international@jaas.gr.jp)

日米友好基金による旅費・滞在費補助金の受給者について／2022 年 OAH 大会

2022 年 3 月 31 日～4 月 3 日にボストンで開催された OAH 年次大会への参加希望者は, 残念ながらありませんでした。なお, 次年度の OAH 年次大会は, 2023 年 3 月 30 日～4 月 2 日, ロサンゼルスで開催予定です。留学中の大学院生に対する, 同大会への旅費・滞在補助金募集は, 2022 年 12 月に行います。

国際委員会

Organization of American Historians 派遣来日研究者のお知らせ

2022 年度の OAH/JAAS Short Residency Program による派遣研究者が次の 2 名に決まりました。このプログラムはアメリカ史を中心に, 日本の大学院生, 学部学生の指導と研究者の相互交流を目的とするもので, 研究者は各大学に約 2 週間滞在します。研究者の専門領域, 受け入れ校と担当者, 滞在期間は以下の通りです。

Farina King (Northeastern State University)

専門領域: 先住民史, 記憶論, 教育史

受け入れ校/担当者: 大妻女子大学/佐藤円会員

滞在期間: 2022 年 5 月 30 日～6 月 16 日まで

Eric Loomis (University of Rhode Island)

専門領域: 労働史, 環境史, 西部史

受け入れ校/担当者: 専修大学/南修平会員

滞在期間: 2022 年 5 月 27 日～6 月 18 日まで

国際委員会

『アメリカ研究』第 57 号「自由投稿論文」募集のお知らせ

学会機関誌『アメリカ研究』(年報)は 2023 年 3 月に第 57 号を刊行する予定です。会員諸氏の積極的な投稿をお待ちしています。

1. 内 容 アメリカ研究に関する未発表論文。前年度『アメリカ研究』もしくは『英文ジャーナル』に論文が掲載された方は, 本年度の投稿をご遠慮ください。また, 同じ年度に, あるいは年度をまたいで『アメリカ研究』と『英文ジャーナル』の双方に投稿することはできません。これはなるべく多くの会員に発表の機会を提供するためです。
2. 枚 数 論文は 33 字×34 行のレイアウトで 19 ページ以内(註を含む)。
執筆要項は学会ウェブサイトを参照のこと。http://www.jaas.gr.jp/journal_guide.html
3. 原稿締め切り 2022 年 8 月 31 日(水)
4. 提 出 電子メールで年報編集委員会宛て(nenpo@jaas.gr.jp)にお送りください。

* 投稿希望者は, 論文題目を 2022 年 6 月末日までに電子メールで, 年報編集委員会宛て(nenpo@jaas.gr.jp)にお申込みください。

年報編集委員会

『アメリカ研究』第57号「特集論文」募集のお知らせ

『アメリカ研究』第57号の特集テーマは「裁くアメリカ/ 裁かれるアメリカ」です。趣意は以下の通りです。

アメリカ合衆国に関心を持つ者であれば、歴史に名を刻む「裁き」に遭遇したことがあるだろう。たとえば、キリスト教に関心を寄せる者であれば、セイレムの魔女裁判やヘスター・プリンに緋文字を負わせた裁判、あるいは1920年代の進化論裁判に思いを馳せるだろう。人種問題を学ぶ者なら、南北戦争の導火線となったドレッド・スコット裁判や、南部の人種隔離体制を容認した19世紀末のブレッシー対ファーガソン裁判と、その判決を覆して公民権運動に弾みを与えたブラウン対教育委員会裁判を知らないはずはない。ジェンダー問題に目を配る者であれば、人工妊娠中絶を規制する国内法を違憲としたロー対ウェイト裁判以降の訴訟や同性婚を認めた近年の合衆国最高裁判所の判決から目を離せないだろう。

第二次世界大戦の戦勝国として一連の国際軍事法廷で日本やドイツを裁いたアメリカにおいて、「裁き」は国内にとどまるものではない。しかも、それは司法の外でも目撃されてきた。たとえば、ビリー・ホリデイが「奇妙な果実」として歌った人種隔離体制下の黒人へのリンチや、自警団の伝統に由来するさまざまな私的制裁。また、非米活動委員会による芸術創作活動の監視や、アーサー・ミラーが『るつぼ（クルーシブル）』において魔女狩りに擬えたマッカーシズムによる社会的制裁も、アメリカの「裁き」にはかならない。

これらの「裁き」に通底するものは、「正義」の実現に対するアメリカの飽くなき欲求である。つまり、アメリカは許されざる「悪」を見出し、それを徹底的に放逐する正義の国家であろうとしてきたのではないか。しかし、いかなる「裁き」にも「誤審」や「冤罪」がつきものである。裁く者ではなく裁かれた者にこそ正義があったのかもしれないし、裁かれるべき者が裁かれなかった可能性もある。ここでひとつの問いが浮かびあがる——アメリカは、誰が、誰を、何を、何のために裁いたのか（裁かなかったのか）、そしてそれは歴史の検証に堪えるものなのか。

次号の特集では標記のテーマのもと、司法の内外を問わず「裁き」に焦点をあて、アメリカの「正義」を再検証する論考を募集したい。

*「特集論文」に応募希望の会員は、2022年6月末日までに、氏名・所属・論文題目および構想・資料などの説明（400字程度）を電子メールで、年報編集委員会宛て（nenpo@jaas.gr.jp）にお申し込みください。その際のタイトルは「『アメリカ研究』特集応募」と明記してください。執筆要項は学会ウェブサイトを参照のこと。

http://www.jaas.gr.jp/journal_guide.html 原稿締め切りは2022年8月31日（水）。

年報編集委員会

アメリカ学会著作権ポリシー策定のお知らせ

年報『アメリカ研究』掲載論文のJ-STAGE掲載を再開しました。それに伴い、アメリカ学会として著作権ポリシーを策定いたしました。

アメリカ学会著作権ポリシー

1. アメリカ学会は、機関誌『アメリカ研究』および *The Japanese Journal of American Studies* に掲載された論文の著作権を保持し、印刷媒体・伝子媒体でこれを公開する権利を有するものとする。
2. 論文著者は、アメリカ学会からの書面による許諾を得て、掲載論文を印刷媒体に転載することができる。ただしその場合は、初出情報を表示すること。
3. 論文著者は、アメリカ学会からの書面による許諾を得て、掲載論文を電子媒体（個人のWebページ、著者が属する機関等のWebページ、研究資金助成機関のWebページ等）上に転載することができる。ただしその場合は、権利表示を行うこと、出版社版（電子版機関誌）へのリンクを行うことを条件とする。
4. *The Japanese Journal of American Studies* については、著作権に関する本ポリシーの規定はVol. 32（2021）およびそれ以前の号の掲載論文には遡及適用されない。

年報編集委員会・英文ジャーナル編集委員会

会員のみなさまにお願い

ご住所・所属等の変更が生じた場合には、速やかに事務局（office@jaas.gr.jp）までお知らせください。また、メールアドレスを登録されていない方は、極力ご登録くださいますようお願いいたします。

黒沢真理子 著

『ナポレオンの柳』

——西洋人と柳、墓地、ピクチャレスク』

(彩流社, 2021 年, 3,300 円)

アメリカで 18 世紀から 19 世紀末にかけて生じた柳への熱狂というべき現象を、史資料を緻密に読み解きながら掘り下げる景観研究の碩学による研究集成である。第 6 回清水博賞受賞作『アメリカ田園墓地の研究 生と死の景観論』（玉川大学出版部, 2000 年）の前後に執筆された 4 編の論考を軸に一冊の本として見事に仕上げられている。貴重な図と写真の数々がこの魅力的なアメリカ霊園史の物語に彩りを添えている。

各章を密接に結束させているのが「ナポレオンの柳」。著者によれば、柳は、イギリスにおいては文人ポーブによって、アメリカにおいてはワシントン大統領の養子らによって、18 世紀後半にはすでに受容されていたが、この樹木への熱狂を決定的なものとしたのは、ナポレオンの死である。ナポレオンがセント・ヘレナ島に捕囚された頃、すでに現地では東インド会社によってイギリスの景観が整えられ、柳が豊かに移植されていた。ナポレオンの死後、葬儀も埋葬も柳の下で行われるのは、こうした植生を背景としている。その後、メランコリーな優美さを醸し出す柳の絵画がアメリカに紹介されると、ナポレオンのイメージと相まって、人びとの間で柳への熱狂が生み出されたというわけである。

アメリカ研究の観点からとくに興味深いのは、そうしたトランス・アトランティックな影響下で成立した東部の田園墓地が西部へと移植される時、その特色を変容させていく過程である。本書の後半部、ボストン郊外に位置するマウント・オーバーン霊園を取り上げた箇所では、「墓地」を俗と聖の対立軸のどこに位置づけるか、という価値観の揺らぎが跡づけられている。19 世紀半ばの墓地は、税制面という実利的な理由で「聖なる地」と位置づけられる必要があった、という指摘も鋭い。田園墓地をめぐる自然美が厳肅さを凌駕する際、宗教の役割の低下を懸念する声を擲い上げて論じる手捌きも見事だ。経済、自然、宗教が複雑に絡み合う、墓地研究ならではの興味深い視点が提供されている。

19 世紀半ば以降、墓地の世俗化は西漸運動とともに拍車がかかる。(中) 西部の霊園は、マウント・オーバーン霊園をモデルとしながらも、〈芝生〉と低い墓石という開放的な空間を特徴とするようになる。しかしながら、従来型の田園墓地は西部では定着せず、市街地から排除されたり、ある種のテーマパーク化が施されたりすることになる。このように東部から西部への「墓の文化の移行」を辿ることで、アメリカ人の墓地に対する考え方が浮き彫りにされているのだ。本書は、アメリカ研究における景観論のみならず、自然観、宗教観、死生観を考究する際に参照点とすべき研究書であると同時に、北米で濃密なフィールドワークをしようという向きにとっても、必携の手引書となるにちがいない。

山本洋平 (明治大学)

吉田亮 編

『変容する「二世」の越境性

——1940 年代日米布伯の日系人と教育』

(現代史料出版, 2020 年, 2,800 円)

1940 年代のアメリカ西海岸に暮らした日系人は、排日運動による人種憎悪の対象であった。大日本帝国海軍の真珠湾攻撃は、反日感情を増幅させ、日系アメリカ人強制収容という、重大な人権侵害につながった。そのため、既存の 1940 年代の日系二世に関する研究は、強制収容とそれに続く二世で編成された 442 大隊での死闘などが圧倒的に多い。本書は、そうした主流の二世研究から一線を画し、1940 年代という難しい時期を、日系二世が東海岸の都市や日本、ブラジルでどのように過ごしていたのか、一世や白人の宗教家とどのように関わっていたのか、といった論を展開し、日系二世研究に深みを与えている。

本書は 8 章から構成されている。第一章(東栄一郎)は、1940 年代に日本に住んでいた日系アメリカ人二世を、日本の軍国主義下における無力な被害者、とする従来の見方に対して、二世たちはアメリカで培った文化資本(英語やアメリカ社会に関する知識)を日本に供することで、主体的に生存戦略を行ってきたエージェントである、という新たな二世像を作り出している。第二章(高橋典史)は、日米開戦後活動停止とされていたハワイの天理教や金光教といった新興宗教が、停止中も活動を絶やすことなく、戦後日本の本部からの支援を受けながら復興し、二世の活躍の場となっていた過程を説明している。第三章(高木(北山)真理子)は、シアトルの日系アメリカ人教会で牧師をしていたエメリー・アンドリュースが、日系アメリカ人二世が強制収容された後、彼／女らが収容されたアイダホ州ミニドカ収容所に自身も移り、二世に対し継続的に支援を続け、収容後の二世のアメリカ社会復帰を献身的に支えたことについて、詳細に論じている。第四章(竹本英代)と第六章(松盛美紀子)では、杉町八重充や松本亨といった移民世代のキリスト教指導者が、強制収容所の外から、いかに二世支援に当たったか、そして彼らの支援の背後には、白人キリスト教徒たちの粘り強い支援もあったことを明らかにしている。第五章(本多彩)と第七章(吉田亮)では、シカゴとニューヨーク二都市の日系アメリカ人の活動を詳細に報告している。両都市では、日系アメリカ人は強制収容対象にならなかった。シカゴの日系仏教界とニューヨークの日系プロテスタント教会の二世を含む日系アメリカ人たちは、それぞれの地で、西海岸で強制収容された同胞の再定住ならびに戦後日本の復興支援を行った。こうした行動を通じて、日系アメリカ人は日米両国に貢献する市民となっていく。最終章の第八章(根川幸男)では、第二次世界大戦の影響をほぼ受けなかったブラジル農村部で生きた、日系ブラジル人二世の少女の成長が、本人の日記という極めて稀な資料を通じて論じられている。

1940 年代の日系二世の越境性と市民形成について、これまでにない多角的視座から論じた本書は、日系二世研究において必読の一冊であるといえるだろう。

ウォント盛香織 (甲南女子大学)

寺地功次 著

『アメリカの挫折

——「ベトナム戦争」前史としてのラオス紛争』

(めこん, 2021 年, 5,500 円)

ベトナム戦争期、ラオスには 200 万トン以上の爆弾がアメリカ軍により投下された。実に、これは第二次世界大戦で日本とドイツに投下された爆弾の総量を上回るものであったという。こうしたラオス介入の起源は、アメリカによるベトナムへの本格的介入のはるか前に遡る。

本書は、第二次世界大戦が終結した 1945 年から「ベトナム戦争」が本格化する 1965 年までのアメリカのラオス政策について分析した外交史研究である。膨大な量の一次資料に依拠した本研究は全 12 章、500 ページ以上にわたるものであり、著者のこれまでの研究の集大成と言えるであろう。

「なぜアメリカは『自由と独立』を擁護するためという名目で、人口が 200 万人にも満たなかったこの遠い国ラオスに自ら出かけていったのか、そしてなぜアメリカの政策は挫折することになったのか」(2 頁)、そう著者は問いかける。

本書から明らかになるのは、ラオスにおける度重なるアメリカの挫折である。1954 年のジュネーヴ会議では、アメリカはジュネーヴ合意に署名することを拒否して、国際的に孤立した。1955 年のラオスでの総選挙、その後の左派パテート・ラーオを含む統一政府の形成過程、1958 年の補完選挙でもアメリカは失敗を繰り返した。そして、パテート・ラーオに対抗するため、アメリカはラオス保守勢力を糾合する過程で、軍部・国益防衛委員会 (CDNI) への関与を深めていく。

しかしラオス政治の不安定化には歯止めがかからず、アメリカは軍部・CDNI に引きずられていく。1960 年にコンレーのクーデターが起きると、アメリカは中立派スワンナプーマー政府ではなく、軍事能力も国民の支持も欠く保守派のプーミーを支援する。その結果、ラオスの軍事情勢はさらに混迷の度を深めた。続くケネディ政権は 1962 年にラオス「中立化」を実現し、軍事要員を「撤退」させたものの、パテート・ラーオ排除の動きは止めず、ラオス国内諸勢力の対立は続いた。1963 年以降は悪化する南ベトナム情勢と連動するかたちで、アメリカは空爆を中心にラオスへの軍事介入を深めていくことになる。

このようにアメリカは、後にベトナムで繰り返すことになる「介入・挫折・撤退」の失敗にすでにラオス紛争で直面していた。その要因には、アメリカの共産主義勢力に対する不信感と軍事偏重の支援形態、軍・軍人の重視、自由と独立、多元的な民主主義の原則の軽視があった。

膨大な一次資料を批判的に検証した上で歴史を再構成することで、著者はアメリカのラオス政策が抱える問題点を浮き彫りにすることに成功している。世界的に見ても非常に高い学術的水準にある本書が、アメリカ外交史研究の進展に大きく貢献することは間違いない。

手賀裕輔 (二松学舎大学)

小倉いずみ 著

『トマス・フッカーとコネチカット』

(金星堂, 2020 年, 5,940 円)

会衆派牧師トマス・フッカーは「コネチカットの父」と呼ばれる植民地創設者である。ケンブリッジ大学でピューリタンの影響を受け、取締り激化の中、1631 年、オランダに亡命する。2 年後、マサチューセッツ湾に移住したフッカーはニュータウン (現ケンブリッジ) 教会牧師となる。ハーヴァード創立に関わり、ジョン・コットンと共に植民地を担うリーダーとなることが期待された。ところが、1636 年、娘婿トマス・シェパードに教会を譲り、ハートフォードへと南下してコネチカット植民地建設を開始する。結果、ピューリタン勢力は南へ拡大し、やがてオランダ領ニューアムステルダムは英国領ニューヨークに変わる。

ハートフォードには、カルヴァン主義の影響が残る保守的な町のイメージが伴う。コネチカットで創立されたイエールは、ハーヴァードのユニテリアニズムと対照的に、正統主義神学を保持し続けて現在に至る。B・ティブソンは、*Hartford Puritanism: Thomas Hooker, Samuel Stone, and Their Terrifying God* (Oxford, 2015) で、フッカーのカルヴィニズムの特徴を分析したが、正統派カルヴィニズムはコネチカット植民地に根付いた。

本書の第 1 章は、勅許状を根拠に自律的植民地創設に成功したウインスロップの政治的手腕をとりあげる。2 章は、オランダ亡命時のフッカーに焦点を当てる。改革主義の本拠地で長老派神学者と討論の末、会衆主義教会政治理論を確立したフッカーは、コネチカットでこれを実践する。3 章では、ニューアムステルダムにおけるオランダの緩やかな統治に巧みに介入して勢力拡大し、1664 年の英蘭戦争を経て、英領ニューヨークへと変えたピューリタンのしたたかさが紹介される。

フッカーは、コットンと異なり、「神学という知識の象牙の塔に閉じこもらず、常に政治の場に登場した」(190) と著者は論じる。契約神学を教会契約と社会契約の両方で実践する公共神学はカルヴァンのジュネーヴ体制に通じる。すなわち、フッカーはカルヴァン主義をイングランドとオランダで学び、これを新大陸へ持ち込んだ。聖職者フッカー自身が大地主となったように、コネチカット川流域には「River Gods」と呼ばれる有力なピューリタン・ファミリーが台頭する。宗教的理想を掲げ、実利を巧みに獲得するコネチカット・ピューリタニズムの合理主義を本書は描き出す。土地獲得に際し、ネイティヴ・アメリカン部族間抗争が誘発される中で翻弄されるロジャー・ウィリアムズの苦労話も興味深い。

ユニテリアニズムに席卷されるマサチューセッツ湾と異なり、コネチカットは保守カルヴィニズムを旨とし、土地所有に根ざすアメリカ型民主主義を確立する。多くのカラー写真や貴重な図版資料に、現地調査への著者のこだわりが伺われる一冊である。

増井志津代 (上智大学)

板津木綿子 編著 小澤智子・北脇実千代 著
『食と移動の文化史
——主体性・空間・表象をめぐる抗い』
(彩流社, 2021 年, 4,400 円)

国家の枠組みを基本とする食の捉え方は、食をめぐる経験や事象が流動的で、複雑な位相をもつことをみえにくくしてしまう。このような問題意識を反映した本書は、食をめぐる人・物・「概念」の移動、あるいは移動による食文化の変容の検証を通じて、人種やジェンダーなどの「社会的構築物」がいかに社会規範を再生産しつつ、ナショナリズムや帝国主義に組み込まれてきたのか、そしてこのような力学が働くなかで人びとがいかに「主体的」に行動してきたのかを丹念に炙り出している。

19 世紀末から 20 世紀初めの食と移動をめぐる事象を、多岐にわたる資料を駆使しながら考察する本書は、食と移動の交差する場が実にさまざまな集団や個人の利害が絡み合う政治性を孕んだ空間であることを実証する。たとえば、小澤智子による 1 章は、「日本茶」の製茶の場でもあった横浜外国人居留地が、「再製茶女工」の経験を含めた多様な移動性が混在する多文化空間であることを詳らかにしつつ、帝国主義の市場や幻想に組み込まれた環太平洋的展開として「ジャパニーズ・ティー・パーティー」へと目を向ける。また 5 章（小澤）では、恵泉女学園に留学中の「二世生徒」が英語で作成した料理書『日本料理と作法』が、「二世生徒」にとって「日本文化」体験を「アメリカ社会にアピールする手段」である一方で、学園の広報戦略、ジェンダーと異性愛をめぐる社会規範、英語圏への「日本文化」の伝搬などを奨励する装置としても機能してきたことを立証する。

「日常に潜む複雑な政治性」と同時に本書が重視するのは、個人の「主体性」である。『日米新聞』の料理をめぐる言説を検証した北脇実千代の 2 章では、日本からの移民や二世の食文化が、複数の言語空間を行き来し、ジェンダー的価値観や社会的現象を色濃く反映しながら、各家庭や個人の多様な事情によっても形作られてきたことを明らかにしている。ハワイ砂糖黍ブランデーの食文化に着目する 4 章（北脇）もまた、個の移動が「異なる食文化に触れる機会」として機能し、「エスニック集団」の枠組みを超えた「主体的な交流」を生みだしてきたことをオーラル・ヒストリーに読み解く。

本書は、資料に読み取ることのできない人びとの日常にも眼差しを向ける。板津木綿子による 3 章では、1920 年代ロサンゼルスにおけるピクニック文化が、新しいコミュニティ空間を生み出す「一次的」装置、白人中流階級出身者の覇権を刷り込む「二次的」装置である一方で、公的空間や活動記録からも排除される傾向にあったエスニック・マイノリティに、一時的ではありながらも「空間を領有する自由度」をもたらしたことを見逃さない。

序章で板津が指摘するように、パンデミックによって人の移動が制限されるなか、食の移動はその「強韌性」を呈してきた。〈新しい日常〉が形成されつつある現在、食と移動の関係性について多くの示唆を与えてくれる一冊である。

松永京子（広島大学）

小笠原亜衣 著
『アヴァンギャルド・ヘミングウェイ
——パリ前衛の刻印』
(小島遊書房, 2021 年, 3,300 円)

本書は作家の修業時代をパリで過ごしたヘミングウェイが、絵画をはじめとする前衛芸術の影響を存分に受けて生みだした散文の特徴を提示し、それが近代作家としてのヘミングウェイとその文学を晩年まで支えたことを示すものである。

まず第一部「前衛の衝撃」では、セザンヌのように風景を書くことを願ったヘミングウェイがそれをどう実践したかを、遠近法の逸脱や面の連なりから探っている（一章）。空間を面で捉え、視点の移動を作品内に盛り込んだセザンヌの手法をヘミングウェイの中編にも読み取り、「読者が作品を読むときに風景が身体感覚をもって立ち上がるような創作」こそが「セザンヌのように」の意味だと結論づけている。また、短編集『われらの時代に』の構成から視覚の重要性や断片の集積で一枚の絵を成すキュビズム絵画の特徴を（二章）、また同書所収の短編から映画カメラがズーム・イン／アウトするような実験的な語りを見いだしている（三章）。

第二部「戦争の衝撃」では、アングソン作品との関連性を指摘されることの多い「ぼくの父さん」に着目（四章）。視覚的・映画的な文体や第一次大戦後に人々を襲ったこの世の不条理をまとう当作品にアングソンにはない近代性を見いだしている。また、作家ジュナ・バーンズの『夜の森』との関連から『日はまた昇る』における移動性・脱中心・永遠の現在を指摘（五章）。スタインや彼女の恩師ウィリアム・ジェイムズの思想の系譜につながる「永遠の現在」が当作品にも確認できることを示すと同時に、ジェイクとブレットが最終場面で永遠の現在を重ねていくしかない悲劇を、近代的な「移動」の情景の中で描いていると指摘する。さらに六章では、エドワード・ホッパーの絵画『ナイトホークス』を軸に、ヘミングウェイの「殺し屋」における構図や省略技法の妙を確認するとともに、「清潔で明るい場所」でも強調される電灯の光に「神は死んだ」近代を読みとっている。

第三部「視覚性の衝撃」では、まず『エデンの園』における「見る男／見られる女」という異性愛主義に基づく視覚性がキャサリンによって攪乱される過程が詳述される（七章）。また 20 世紀初頭の「まずアメリカを見よう」運動にも着目、ヘミングウェイがその本質をスペインやアフリカの描写を通じて幻視される原初的なアメリカの空間として内面化し、「[[主人公が] 自己回復できる神聖な空間」として機能させていると述べる（八章）。

本書の最大の魅力は、各部の題目が示す前衛、戦争、視覚が互いに共鳴しあい、ヘミングウェイのパリ時代がこれまで以上に拡がり深みを見せ、新たな作品解釈をも可能にしている点にある。ヘミングウェイとパリを別角度から切り取ったコラムも充実している。ジャンルを越境しながら作品論を展開するだけでなく、写真や絵画を多く取り入れ、章間にコラムを断片のように入れ込む——本書それ自体が多分に前衛的なのである。

フェアバンクス香織（文京学院大学）

遠藤泰生 編

『反米——共生の代償か、闘争の胎動か』

(東京大学出版会, 2021 年, 6,160 円)

昨今で反米研究が隆盛したのは、9.11 同時多発テロ事件後、単独行動主義を強めたブッシュ政権期、「米国第一」を掲げ、多国間協調に背を向けたトランプ政権期だった。本書は、こうした時事的な要請に基づく反米研究とは一線を画す。反米は、反近代、反資本主義、反個人主義、反帝国主義なども含む。反米を考察する前に、そこで問われている「アメリカ」を明らかにする必要がある。本書は、この困難な問いに取り組む貴重な書だ。

I 部は、二国間関係における反米に光を当てる。ベトナムでもアフガニスタンでも、アメリカは理念を大々的に掲げた介入が失敗した後、理念は正しかったのだと自己正当化する傾向にあるが、西崎文子 (1 章) はメキシコの事例から、アメリカの理念外交そのものが他国の反米感情を刺激する要素を含むと指摘する。反米を国是とするキューバの富裕層の米国への亡命に注目し、反米が足かせとなって国内体制の変革に失敗してきた経緯を明らかにした 2 章 (高橋均)、中国に反米はあるが、反復される構造としての反米はないと指摘する 3 章 (村田雄二郎) はともに、ある国を「親米」「反米」と括ることがいかに物事の単純化であるかをよく示している。

II 部は、冷戦を生きた文筆家の考察を通じ、反米の複雑な意味合いを明らかにする。金志映 (4 章) は火野葦平の作品から、戦後日本の反米を、より広くアジア・太平洋地域における民族主義や共産主義との連鎖のなかで捉える道を探る。小川浩之 (5 章) は、米ソと異なる「第三の勢力」「中道」の路線を追求した E.H. カーから英国知識人の考察から、一般には親米とみなされる英国の反米の独特な諸相を解明する。

III 部は、米国の巨大なパワーを前にした文人たちの対米観を検討する。竹村文彦 (6 章) は、米国の経済力・科学技術に感嘆したホセ・マルティが、米国の資本主義や帝国主義への洞察を深めるにつれ、批判を強めていった様に注目する。菅原克也 (7 章) は、第二次大戦末期の日本全土へのアメリカの無差別爆撃に「脅威」とともに「驚異」を覚えた文人たちの認識に、反米と親米の背中合わせの関係を見出す。

VI 部は、観念としてのアメリカがロシアやヨーロッパのアイデンティティの形成にいかに関与したかを解き明かす。安岡治子 (8 章) は、ソ連崩壊時にロシアの米国に対する期待がピークを迎えた後、期待が裏切られるにつれ、新ユーラシア主義などロシアの新たなアイデンティティが模索されていった様を描く。ロブ・クルス (9 章) は、ヨーロッパにおけるアメリカ大衆文化の受容過程に、主体的な選択や自由を見出し、受動的な意味合いを強く持つアメリカナイゼーションという言葉に再考を迫る。

反米は、現状の米国およびそれが体現する価値を批判し、オルタナティブの世界を展望する創造的なものでありうる。編者の遠藤が「逆説的反米」と呼ぶものが機能する余地は、今の世界や日本にどれだけあるだろうか。本書はこの魅力的な問いのはじまりの書でもある。

三牧聖子 (同志社大学)

西山隆行 著

『〈犯罪大国アメリカ〉のいま

——分断する社会と銃・薬物・移民』

(弘文堂, 2021 年, 3,080 円)

アメリカにおいては 1970 年代以来、ニューディールの福祉国家の基盤が崩される一方で、刑罰国家が拡張してきた。世界各国との比較で人口あたりの刑務所収容者数は永らく一位の座を守っている。また刑事司法関連費用の伸びは他の政策分野と比べて顕著である。この変化と犯罪問題の概要について分析を行ったのが本書である。すでに刑事法あるいは社会学分野からのアプローチを用いた研究の蓄積があるが、本書の一番の魅力は政治学の理論をあますところなく援用している点にある。

取り上げられるトピックは多岐にわたる。犯罪政策の厳罰化が連邦から地方へと伝播した過程 (第 1 章)。都市の秩序と暴力 (第 2 章)。利益団体政治としての銃規制 (第 3 章)。二大政党がそれぞれ違う種のドラッグに直面する現状 (第 4 章)。対テロ政策から転化した不法移民対策 (第 5 章)。連邦制の下での聖域都市の登場 (第 6 章)。BLM 運動に端を発する警察改革の展望 (終章)。近年のアメリカ政治におけるイデオロギー状況の変化が犯罪政策の形成過程に影響を及ぼしていること、また犯罪問題をめぐってアメリカ社会と二大政党が深く分断されていることが本書を通じて示される。

日本の市井生活では肌身を感じるものが少ないが、アメリカでは悲しいかな日常的に横行する銃犯罪や薬物問題について、ここまで詳細に説明した本は他に例を見ない。合衆国憲法をはじめとする政治制度の法解釈に留まらず、人種や格差をはじめとするアメリカ社会の諸相がその政治や政策形成とどう密接に結びついているかを考察するという視角は、著者が福祉や都市政策についてこれまでに行ってきた研究にも一貫して共通するものであり、とても重要である。ドラッグの分類についての詳細な説明や、囚人人口には移民法違反で拘束されている者が多く含まれている点など、本書から評者が新たに学んだことは多くあった。

欲を言えば、次の二つの点についても著者の分析を尋ねてみたい。リーマンショック後の不況の煽りを受け、2008 年以後は刑務所予算を漸次削減する、ないしは刑務所収容者数を増やさない方向に超党派で舵が切られた。過去半世紀の間に福祉国家が刑罰国家に取って代わられたという本書冒頭の指摘に評者は大筋で同意するが、この近年の変動はどのように評価することができるだろうか。また、オビオイド危機や聖域都市など、近年メディアで注目を浴びようになった現象は、どこに歴史的起源を見出せるだろうか。犯罪問題はアメリカ研究として学術的に重要であるばかりでなく、その社会に生きる者の人生を切実に左右する。今後も本書の続きを読む機会があることを願っている。

平松彩子 (東京大学)

新入会員 (2022 年 2 月 20 日現在)

吉田晋也	University of Minnesota (院)	史 社 エ
坂根隆広	関西学院大学	文
陶波	千葉大学	史 宗 日
吉留公太	神奈川大学	外 政 史
植木安弘	上智大学	外 政
グロンウォルド・ナサニエル (GRONEWOLD, Nathaniel)	北海道大学 (院)	日 地 環
名和玲	東京理科大学 (講)	文 ジ 宗
プレストン・ナサニエル (PRESTON, Nathaniel)	立命館大学	文
チルトン・マイルズ (CHILTON, Myles)	日本大学	文 化 カ
佐藤清子	静岡県立大学など (講)	宗
内山尚子	広島大学	社 化 芸
ロメロ・イサミ (ROMERO, Isami)	帯広畜産大学	外 ラ 日
住野満稲子	明治大学	教 ジ 人
尾身悠一郎	一橋大学 (院)	外 史 政
長史隆	立教大学	外 日 史

(* 入会申し込み順。専門領域の略記については、PDF 版会員名簿作成用アンケートおよび学会ホームページに記載されている新表記法による)

会報 207 号において新入会員の氏名に誤字がありました。お詫びして訂正いたします。

(正) 本多康作 (誤) 本田康作

編集後記

新型コロナウイルス感染症の感染拡大の第 6 波が収束しないなかで始まった、ロシアによるウクライナ侵略に終息の兆しが見えない。その真偽の程は別として、ロシアが侵攻の理由として掲げる NATO の東方拡大に関しては、複数の会員によるそれぞれ大部の研究書や優れた学術論文が存在する。こうした研究成果が少しでも日本社会で共有され、ウクライナの存立をめぐる停戦交渉との関連で、アジア・太平洋地域についても冷静な議論がなされることを望みたい。

6 月の最初の週末には本学会の年次大会が 3 年振りに対面で開催される予定と聞いている。学際性を特色とする本学会の年次大会において、転換期にあると思われるアメリカ合衆国の諸側面について、多様な接近法を通じて理解が深まることを期待したい。

(中嶋啓雄)

2022 年 4 月 15 日 発行

ア メ リ カ 学 会

〒550-0001 大阪市西区土佐堀 1 丁目 4-8

日栄ビル 703A

あゆみコーポレーション内

Tel: 06-6441-5260 Fax: 06-6441-2055

<http://www.jaas.gr.jp>

発行人 宇 沢 美 子

編集人 本 合 陽

印刷所 (株)国際文献社

〒162-0801 新宿区山吹町 358-5